

# 学校新聞の有用性とその在り方に関する研究

## —高校生が自分ごととして「平和」を考えるには—

岡山県立岡山南高等学校新聞部

### 1. はじめに

岡山南高新聞部は、学校新聞「岡山南高新聞」を年間3回程度発行している。学校行事の様子や生徒の活躍等を報道するだけでなく、これまで「SNSが観光にもたらす効果」「地域商店街の抱える課題とこれから」「校内外から校則を見直す」など、経済や教育など読者である在校生に新たな問題提起を行う紙面づくりを心掛けてきた。

現在、ロシアによるウクライナ侵攻は収束する気配もなく、世界規模の問題となっている。この事実を見過ごすわけにはいかないと、読者である全校生徒にこのことを「自分ごと」として捉えてもらうことを目的に紙面作りを行った。今回の研究では、学校新聞が読者である高校生と制作者である新聞部員の意識の変容を調査し、メディアとしての学校新聞の有用性とその在り方を考察する。

### 2. 生徒の実態

在校生を対象に、ウクライナ侵攻に関する関心度調査を行った結果、「ウクライナ侵攻に関心がある」と回答した生徒は8割だった。「ウクライナに対してできること」は、6割以上の生徒が「知ること」と答えたが、情報収集はたまたま流れてきたテレビやSNSでしか行っておらず、ウクライナの大統領名や首都名など、基礎的な知識も乏しい生徒もいた。

### 3. 新聞制作とそれによる生徒の変容

岡山南高は、商業学科・家庭学科をもつ専門高校である。そのため、ウクライナ侵攻が世界経済、地域経済に与えた影響に焦点を当てて、学校新聞「岡山南高新聞」で特集を組むことにした。ポーランドでウクライナ避難者への医療支援を行っている団体の職員、世界経済の研究者、地元スーパーや小売店の店主などを取材した。また、戦争に関する歴史を知ること重要だと考え、第二次世界大戦中の岡山空襲についても空襲展示室の学芸員に当時の様子を聞くなどして、紙面にまとめた。

完成した学校新聞は全校生徒に配付した。その後にアンケート調査を実施し、読後の変化を分析した。アンケート対象者のうち、26%が学校新聞を「読んだ」と答えた。読後の変容は「読んだ」生徒のうち32%の生徒に起きており、25%が「学校新聞がきっかけ」と答えた。インターネットでの情報収集に留まった生徒がほとんどだったものの、自ら調べた生徒が増えたことが分かった。

一方、新聞部員全員が様々な制作のプロセスで「変容した」とした。その中でも、「取材活動」が大きな変容をもたらしていた。「一つの事象もいろいろな目線で分析する必要があることを知った」「自分たち高校生が戦争の歴史を伝えていかなければならないと、自分のこととして考えるようになった」「自分たちで判断し、行動できる人になることが大切であると思う」などと答えている。現在、新聞部員には岡山空襲体験者の声を収集したいという思いが生まれている。高校生を「自分ごと」へと駆り立てるには、体験的な場を設けた探究的な活動を行うことが最も有用であることが分かった。

### 4. まとめ

新聞部は、これまでも読み応えのある紙面づくりを心掛けてきた。しかし、必ずしも多くの生徒に読まれているとは言えない。高校生は忙しい。しかも、毎日大量のチラシや広報誌が配付される。そうした中で意識や行動の変容まで起こすには、今回以上の内容が求められることが分かった。一方、制作側の新聞部員は大きな変容が生じていた。「自分ごとにするとはどういうことか」を追究し続けた結果である。このことは、新聞部員と同様の思考のプロセスを経験すれば、読者も社会的な課題を「自分ごと」にすることができることを現している。今後は、その観点で編集した新聞制作を行っていきたい。